

# 二上山の彼方

## — 當麻の時空 —

志水 義夫

二上山は古代宮都にとってどのような位置を占めていたのかという共通テーマに対して、東麓の當麻という土地を近世から古代にかけて伝承をさかのぼりながら位置付けてみたい。

古代幹線横大路が難波にむけて西に進み竹内峠を越える直前、北側に広がる一帯が當麻である。峠を超えると、そこを「王陵の谷」と呼ぶ人もいるほど、推古天皇陵、敏達天皇陵、用明天皇陵、孝徳天皇陵など7世紀代の皇陵がならび、さらには聖徳太子陵を守る寺院まで存在する特異な地だ。

横大路はその先を羽曳野から河内、難波津へと向かうが、そこにも日本武尊白鳥陵をはじめ陵墓の集中するところであり、そして土師氏の根拠地としても知られている。

二上山の彼方に広がるそういう世界を背負って、當麻の地はたたずむ。

當麻のランドマークをあげれば當麻寺であろう。山につつまれるような土地に建ち並ぶ堂塔、国宝の仏像たちや最古の石灯籠のほかにも初夏、緑が萌え躑躅が燃える中で展開される菩薩のパレードもまた古くから有名である。

まずは菩薩のパレード、當麻寺二十五菩薩来迎会の様子を手始めに、古代にむけて當麻の時空をたどっていこう。

### 1. 當麻寺の祭りと伝承

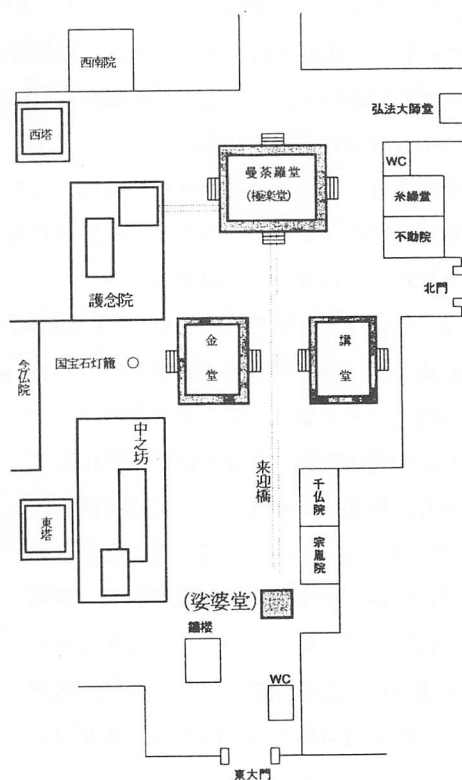
#### (1) 中將姫の旅立ち

##### — 當麻寺二十五菩薩来迎会 —

當麻寺の二十五菩薩来迎会について簡単に現在の行事の次第を見ておきたい<sup>(1)</sup>。

二十五菩薩来迎会、いわゆる練供養が當麻寺で行われるのは例年5月14日だ。古くは3月14日であったらしいし、4月14日に行われたこともあったらしい<sup>(2)</sup>。

当日は午前中までに右図のように会場設営がなされる。この行事の舞台ともいふべき「極楽堂」（普段は「曼荼羅堂」と呼ばれるが、この行事では極楽浄土に見たてられるので「極楽堂」と呼ばれる）から対面の「娑婆堂」まで渡される「来迎橋」は、現在は業者が10日に設営するが昔は青年団が行ったという。橋の脇には「〇〇講中」あるいは個人名・会社名などが墨書され、講や個人、企業などから寄進



當麻寺境内略図

されたものであることがわかる。橋の脇の金堂や講堂は通常通り拝観公開されているが、行事中は基壇上の犬走りが関係者席となる。また参道から娑婆堂付近にかけてはどこでもよく見かける飲食物店（たこ焼・ベビーカステラなど）や地元産物（花や野菜など）を扱う店、沢蟹（カワガニ<sup>(3)</sup>）などを売る露天商がたちならぶ。蓬餅（「姫餅」という）は4月23日から5月15日までの（つまりダケノボリから練供養までの）期間限定品だそうだ。

さて、練供養は葛城市、香芝市、橿原市などに住まう「菩薩講」の人たちが25人の菩薩に扮し、極楽堂から娑婆堂に渡された来迎橋を往復する仏教行事である。

菩薩は「天人」と阿弥陀如来の脇侍である「勢至菩薩」「観音菩薩」および「普賢菩薩」の「三役」から成る。菩薩の役に選ばれた菩薩講（20の地区に分けられる）<sup>(4)</sup>の人たちは午後までに當麻寺を構成する五カ寺（中之院・護念院・奥院・西南院・念仏院）の中の一つ、護念院の方丈に集合する。

午後2時に点呼があり、諸注意が伝達される。その後、各グループ——天人に扮する者には差添人が一人付く。その他合計最大五名まで方丈に入れる——ごとに分かれ、まず差添人が紋服に着替える。差添人の着替えが行き届いたのを確認して天人の衣装が配布される。配布が終わると衣裳の着付けの説明があり、着替えに入る。この段階では面はまだかぶらない。

面を付けるのは本堂で行われる。方丈で着付けが行われている間、面は本堂下陣の下手側に並べられて参拜者に公開されている。副住職による練供養の解説を含んだ法話が行われ、参列者に面をかぶらせたりしている。なお、護念院での菩薩たち（「聖衆」という）の世話をするのは菩薩講とは別組織の「二十五菩薩講」の人たちである。

面は「平成新菩薩面」と呼ばれ仏師丸尾万次郎師により七年かけて新調、平成18年（調査年）の練供養において全部新しく揃った。古い面は4面が鎌倉時代、2面が南北朝時代、18面が室町時代、4面が江戸時代のものであった。行事の古さがしのばれる。

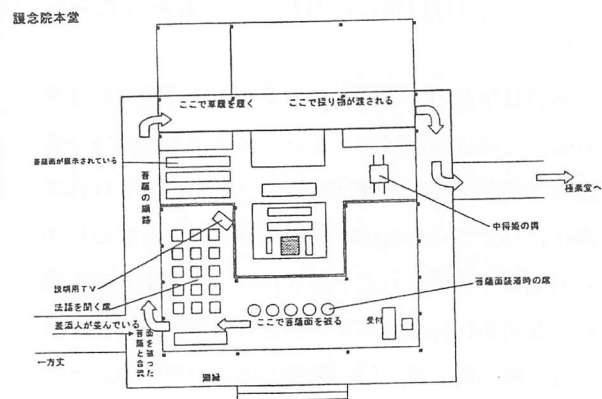
護念院で菩薩たちが準備をしているころ、中将姫剃髪の地と伝える中之坊では、住職による當麻曼荼羅の絵解きと法話が行われている。この絵解きは、現住職が体験したかつて境内で絵解きを専門にしていた者の語りを、記憶と先代住職からの伝授とをうけて復活させたものだといひ、當麻曼荼羅の解説の中で数分ほど語られる。

護念院では、着付けが終わった15時15分ごろ、方丈と本堂とを結ぶ廊下に天人たちが並ぶ。面は本堂で番号順にかぶる。面をつけると視界がわるくなるので差添人が寄り添い、本堂裏にまわって草履をはき採物を受け取って待機する。

全員の面付けも終わろうかという15時50分ごろから本堂の外陣に置かれていた中将姫の輿の動座の準備が始まる。極楽堂（曼荼羅堂）の方から解説の放送が風に乗って聞こえてきた。

16時、中将姫動座。本堂正面から外に出て門を通り、極楽堂の石段を上って橋を渡って娑婆堂に向かう。そのころ護念院の本堂から極楽堂に掘越しに架けられた橋を渡り、菩薩たちが移動する。中将姫の輿が娑婆堂に着くと入れ違いに中之院住職ら天台系の僧が散華しながら橋を渡り極楽堂に向かう。極楽堂につくと堂に設えられた棧敷に着く。

柝がなる。修法が始まる。



護念院本堂

16時20分をまわって、極楽堂で僧たちは読経する一方、楽人による越天楽演奏がスピーカーから流れる中で、極楽堂から稚児行列が娑婆堂にむかって橋を渡りだす。続いて楽人と當麻寺五ヶ寺のうち浄土宗系の住職たちが橋を渡る。真言宗系の僧は極楽堂で勤行を続ける。

16時半。鐘の音が響いて二十五菩薩が極楽堂を出発する。その行列次第は右図のとおり。行列の順番はその年々で4月29日にくじびきで決まる<sup>6)</sup>。娑婆堂では着いた僧たちによる読経が始まっている。

16時40分。スクイ仏・オガミ仏・普賢菩薩が極楽堂から橋にかかる。極楽堂では雅楽が演奏され娑婆堂では和讃が唱詠される。

10分かけてスクイ仏・オガミ仏・普賢菩薩が娑婆堂に至り、そのまま中将姫の像から仏像をスクイとり蓮台にのせ、再びスクイ仏・オガミ仏・普賢菩薩は極楽堂にむかう。二十五菩薩がそれに続く。

スクイ仏が橋の途中を過ぎると、それまでスピーカーから流れていた雅楽（越天楽）が喜太郎の「シルクロードのテーマ」に替る。

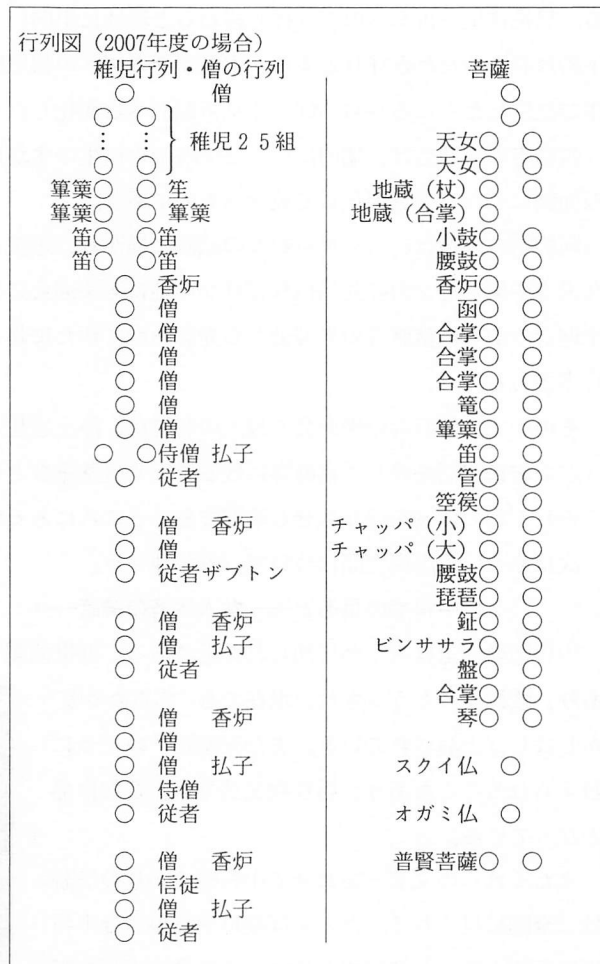
17時。スクイ仏たちが中将姫の魂を携え極楽堂に戻る。その後10分ほどかけて二十五菩薩たちが極楽堂に戻り、そのまま護念院本堂に橋を渡って帰って衣装を解く。17時15分、中将姫の輿が極楽堂に戻りそのまま護念院に戻る。

以上で練供養の行事は終わるが、護念院では片付けが残る。菩薩の衣装は翌日陰干しされ、女性たちの手で方丈の押入れに格納される。

ところで、練供養にあわせて當麻寺の北に位置する石光寺では管理下にある傘堂（影堂）で行事をおこなう。中将姫の縁日だからだという。石光寺には中将姫ゆかりの井戸がありこの蓮から糸を作り當麻寺に納めたという伝承を奈良町の中将姫誕生地（誕生寺）で尼僧が語ったと伝わる。

傘堂は脇にある大池を作ったかつての領主本多マサカズを祀った堂である。堂の世話をするのは大池の水を使っている染野・今在家・新在家の三ヶ大字である。

この行事は「ぼっくり祈願」ともいわれ、参拝者（女性）は傘堂（一本の角柱に宝形造りの屋根のついた施設）の柱に正面と背面を向けつつ堂を拝して時計回りに三周し、最後に逆回りに一周す



傘堂 (城崎撮影)

る。息災往生を祈るもので、拝し終わると現地に出向いている石光寺の住職から持参したハンカチや下着に判をいただき守りとする。本多マサカズへの報恩感謝の気持ちではじまり、お参りした者が健康で往生したところから「ぼっくり祈願」へと変化したらしい。幕末ごろからの風習だそうだ。

當麻寺の来迎会は、端的に言えば中将姫の往生のすがたを、阿弥陀の浄土からが迎えに来るという仮面劇にしたてて具現化して見せるものである。

阿弥陀の来迎は、古くから数々の絵画に描かれ、彫像として象られて現代に伝わり、また樞原市の久米寺や東京等々力の九品仏などほかの地にも来迎会の行事として残っているし、また奈良県宇陀の来迎会のように當麻寺の来迎会から発想を得て新たに起こった行事もある。広く流布傳承されてきた行事である。

その中で、當麻寺の来迎会の最大の特徴は、浄土思想という形而上的世界を中将姫の伝説や語り物などの虚構空間を介して當麻寺に残る堂宇や曼荼羅などの現実空間と強固に結びつけて共鳴させながらそれぞれの領域を成立させる時間であるところにあるだろう。

次はそういう虚構空間について、みてゆこう。

## (2) 中将姫の足あと——女人救済の神話——

中将姫の物語は古くから知られた話である。近世演劇では並木宗輔に浄瑠璃作品「鷗山姫捨松」があり、歌舞伎にもうつされ、現在でも「雪責めの場」がしばしば上演されている。また五説経<sup>6)</sup>の一つに数えられることもあり、語り物文芸でも主要な作品となっている。

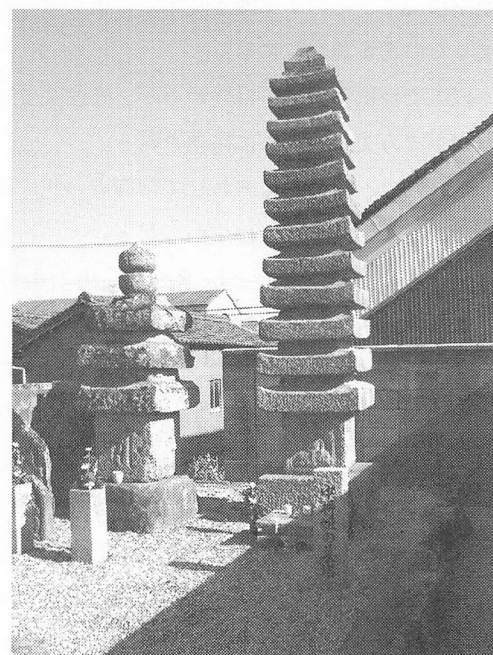
またそれらの文芸とあわせて中将姫ゆかりの伝説地は全国に見られる。たとえば岐阜や島根には中将姫誓願桜と呼ばれる桜樹が残り、また神奈川県秦野市の鶴巻温泉駅から東海大学にむかう道の途中に「落幡（おちはた）」という地名が残るが、これは中将姫の織り上げた幡が落ちたところだと伝える。鶴巻温泉駅の近くには狩野芳崖が描いた曼荼羅を織る中将姫の絵を伝える寺院もある。また、小栗判官の話伝える藤沢市遊行寺（清浄光寺）付近にも中将姫の伝説地があり、唱導文学と在地伝説との関係がうかがえる。浄瑠璃「鷗山姫捨松」の名題にも見えるヒバリヤマは、現在、和歌山県には雲雀山得生寺があり中将姫の菩提をとむらい、奈良県宇陀郡の中将姫の庵跡と伝える地にも、日張山青蓮寺が残る。

奈良市、世界遺産元興寺の近くには中将姫誕生の地と伝える誕生寺と呼ばれる寺院と、中将姫の墓塔を残す徳融寺がある。當麻寺の北にも中将姫の墓塔といわれる石塔があるが、こういう現象は傳承にはつきものだ。

中近世に形成された中将姫伝説の大枠は、横佩大臣こと藤原豊成<sup>7)</sup>の娘と設定され<sup>8)</sup>、継母によるい



徳融寺の「豊成公中将姫御墓」(志水撮影)



當麻の中将姫の墓塔 (志水撮影)



じめと子捨て、姫の苦難という「お約束」通りの展開があって、最後に父のもとに戻った中将姫が出家し往生にあたって曼荼羅を織る、という当麻曼荼羅の縁起譚となっている。

藤原豊成は藤原式家の実在の人物であって、それに従えば平城京の住人であり、奈良町の伝承はその話とリンクする。そこから説経や縁起物に顕著な〈継子いじめ〉や〈流離譚〉が始まる。

美人の評判高く、帝（「はいたい天王」と伝える——「廃帝」=淡路廃帝淳仁天皇を指す<sup>9)</sup>。上代の文献によれば、その母は当麻氏の出である）からは入内を申しつけられるくらいであったが、継母は妬んで大臣に密通淫行をしているかのごとく見せつけることに成功し、父は娘の殺害を家来の武士に命じる。慶安四年刊本「中将姫本地」では「きいのくに、あるたのこうり、ひはり山と、いふところにて、かうべをはねよ」といい、絵巻「中将姫」では「うたのこほりのをく、ひはり山といふ所にて、くひをうつへし」とある。江戸時代初期にはすでに捨てられた地が二つに分かれて語られていた。

かくして山中に住むことになった中将姫は熊野道者や吉野参詣の道者への物乞いによって日々のたつきを得るかわら、称讃浄土経の写経をしてすごす。その間に姫を守った武士たちの身にいろいろの事件がおこるが、それは伝承ごとさまざまな内容となっている。雲雀山得生寺は姫の犠牲になった武士の菩提を妻が供養のために開いたという縁起を残している。

やがて父の大臣がひばり山に狩りにやって来て姫と再会する。このときすでに姫には阿弥陀の加護がついている。

父に連れられて奈良への帰還。そのまま入内が決まる中での発心、出家。姫は奈良から當麻へと、七里の道を歩いてゆく<sup>10)</sup>。その道筋は定かでないが、奈良市から南西方向に向かうと、今の広陵町や香芝市、大和高田市の接するあたりを通る。この付近には中将姫ゆかりの故地が今なお残る。例えば中を流れる高田川は中将川といい、中将姫が休息した橋という「中将橋」が今もかかっている（伝承地=安部・『広陵町史』）。その堤はナデシコで飾られるというがそれも中将姫によって蒔かれたものだと伝える（伝承地=笠・『広陵町史』）。そのおり彼女に月のものがおりてきて着物に血がついたので濯いだという地黒池も残っている（伝承地=笠・『広陵町史』『大和馬見町史』）。そして姫は、中将橋付近から當麻にむかう途中の坂で疲れたので念仏を唱えて極楽の定想を得たという仏ヶ谷という場所もある（伝承地=安部・『広陵町史』『大和馬見町史』<sup>11)</sup>。

姫は、當麻に着くとある僧坊に入り得度する。當麻寺の山門を入れて左側にある中之坊がその故地だと伝える。若き折口信夫が泊りこんで卒業論文を書いたというこの寺の境内には中将姫が女人禁制を押して入山するために三日間念仏を唱えたときに残った足跡のついた石（中将姫誓いの石）や姫剃髪の地ということで寺宝に



高田川にかかる中将橋と二上山（城崎撮影）



地元の人が地黒池と伝える場所（城崎撮影）

「中将法如剃髮剃刀」なども伝わっている。

禪尼比丘の名を得た中将姫は當麻寺に籠り、阿弥陀如来の示現を祈願する。その第6日目、天平7年（説経）もしくは天平勝宝年中（慶安刊本）、天平宝字7年（絵巻）の6月16日（説経・慶安刊本。絵巻は6月1日）に、阿弥陀如来は尼姿で現じ、蓮糸の曼荼羅の製造を託宣するのであった<sup>(12)</sup>。

かくして、曼荼羅の縁起譚となる。

### （3）中将姫の遺産——当麻曼荼羅縁起——

中将姫による当麻曼荼羅の織り上げについては、ことさらに紹介するまでもないだろう。そもそもこの曼荼羅の縁起から中将姫の物語は発展していったといってもいい<sup>(13)</sup>。ここまで近世の芸能と現在の伝承とを結びつけて見てきたが、ここから中世の伝承に視点を移そう。

近世の芸能と中世の伝承との接点に位置するのは謡曲だろう。近世中将姫文芸の〈継子いじめ一流離譚〉と〈中将姫出家—当麻曼荼羅縁起〉という二つの柱は謡曲において「雲雀山」と「当麻」という二つの作品として分離してある。中将姫というキャラクターが共有されているので、両者がすでにひとつの物語として構築されていたことがわかるが、その確認できる最古の姿は永享8年（1436）の西誉聖聡による『当麻曼荼羅疏』だという<sup>(14)</sup>。「当麻」は世阿弥（1363?—1443?）の作だというから、このころに近世的中将姫像の原型が完成したのであろう。

ちなみに「当麻」に次の一節がある（新古典大系『謡曲百番』）。

是は当麻の御寺にて候か。

さむ候当麻の御寺とも申、又当麻寺とも申候、また是なる池は蓮の糸を、濯ぎて清めし其故に、染殿の井共申とから、あれは当麻寺、是は染寺、又この池は染殿の、色々様々所々の、法の見仏聞法ありとも、それをもしさら白糸の、唯一筋ぞ一心不乱に南無阿弥陀仏。

「染殿の井」は當麻寺の北にある石光寺内に現在も伝承地が残る。

中将姫は、前記の二つの物語の構成要素をつなぎ、さらに現在に伝承を残す伝説地を支える重要なキャラクターであるのだが、その誕生は鎌倉時代のようなだ。『当麻曼荼羅疏』以前にさかのぼると、正嘉元年（1257）の『私聚百因縁集』（住信編）に「中将の内侍」があり、寛喜三年（1231）『当麻寺疏記』（九条家本）に横佩右大臣の娘として「字中将」さらに貞応二年（1231）の『当麻曼荼羅注』（証空）に「中将局」が見られ、これが「中将」の初見とされる。このころは横佩右大臣は藤原伊統の名で語られ、豊成の名に変わるのは、中将の内侍の登場後、弘長二年（1262）の『和州当麻寺極楽曼荼羅縁起』からだ。

では、それ以前は誰が曼荼羅を織っていたのか。

中将姫説話——女人による曼荼羅の織成——

の最初の記録は『建久御巡礼記』であるとされる。

有縁起云、麻呂子親王并同夫人、善心凝一、信心無二、請吉土於此処、立精舎於其中、金堂者、弥勒三尊満月之光明旁彰、西堂者、極楽九品宝樹之変相織成、爰夫人常願云、我如何移浄土於斯砌、集衆生於斯遊、可為往生之縁者、然間、去天平宝字七年六月廿三日夜、有化人、以蓮糸織変相、化人与夫人、夜中暗顕畢、不知移一仏土於斯土歟、



石光寺（染寺）に伝わる中将姫の「染め井」  
（志水撮影）

又不知送九品基於斯遊歟、未曾有之心深不思議之念入骨云々、

此縁起時代年号、尤不合歟、

彼寺僧、申サク、織、仏、事、無慥日記、但、此、曼荼羅、下、縁、不、壞、之、時、天、平、宝、字、七、年、云、年、号、慥、被、織、付、タ、リ、キ、其、比、ヨ、コ、ハ、ギ、ノ、大、納、言、云、人、有、之、彼、御、娘、朝、夕、極、樂、願、曼、荼、羅、ウ、ツ、サ、バ、ヤ、ト、願、起、。年、来、乍、思、過、間、ニ、一、化、人、来、一、夜、間、織、行、方、不、知、申、此、大、納、言、御、娘、一、生、間、向、此、仏、タ、ユ、マ、ズ、行、ヒ、テ、極、樂、生、申、伝、

ここには、二人の女性が曼荼羅をもたらした女性として紹介されている<sup>(15)</sup>。一人はヨコハギノ大納言の娘（のちに「中将姫」の名を得ることになる）、もう一人が當麻寺創建発願者、麻呂子親王夫人である。

『建久御巡礼記』の段階で、すでに當麻寺にヨコハギを名乗る人物が関係する伝承が生まれていたわけだが<sup>(16)</sup>、一方で「縁起」として創建発願者の関係者が伝承されていたところに、やっと古代との接点を見出すことができる。

曼荼羅製作者が麻呂子親王夫人からヨコハギ大納言の娘に移っていったのは、その年代のズレによる。「此縁起時代年号、尤不合歟」と記されているように、麻呂子親王は「橘、豊日天皇之皇子、麻呂子親王」（建久御巡礼記）なのである。文面から見て、おそらく御巡礼記は縁起を書記資料から引きうつし、一方で寺僧からの聞き取りを記しているのであって、やがて後者の伝えが発展していったのだろう。

さて、『建久御巡礼記』には當麻寺そのものの縁起を次のように語る。

此寺法名釋林寺、橘、豊日天皇皇子、麻呂子親王、御願也、金堂奉居弥勒、当麻寺、云付事、天武天皇依大友皇子、乱、出吉野宮、逃去美野国、野上不破宮給時、彼宮侍従三位当麻国見真人、捨命立忠節、捧大友皇子、首、献天皇、依、其功勳、叙官位、遷大和国清御原郡、給、後、白鳳九年二月十五日、遷造、也

ここに壬申の戦いで活躍する「従三位当麻国見真人」が登場する。のちの縁起ではしばしば存在が忘れられ、「然麻呂子皇子、持統天皇御宇朱鳥六年驚靈夢之告、遷此寺、於大和国当麻郷」（額安寺本「和州当麻寺極楽曼陀羅縁起」）と聖徳太子の弟麻呂子皇子に取って代わられることも多いが、「当麻真人国見」は古代の記録に名前を残す人物である。むしろ古い時代の縁起にはっきりと名前を残していることから、當麻寺と当麻真人国見との関係を語る伝承の方に、より古さが感じられる。

以上、中・近世の中将姫と當麻寺との結びつきを中心に現代へつながる伝承的世界を見てきた。もとより中将姫関連の話が古代を舞台に設定されているし、種々伝わる語り物の話型も神話から流れ来るものであるが、古代につながるキーワードも見出される。

## 2. 當麻の古代——當摩真人氏と當麻寺——

### (1) 麻呂子皇子と當摩真人国見

さて、當麻寺縁起に登場する麻呂子親王に視点を移したいが、すでに論じたところがあり<sup>(17)</sup>、ここでは要点と問題点を挙げるにとどめる。

まず麻呂子親王であるが、「橘豊日天皇之皇子」というように用明天皇の御子で日本書紀と古事記、さらに上宮聖徳法王帝説に系譜が見え、それぞれで出自を変えて記録されている。

#### 【用明紀元年条】

元年春正月壬子朔、立穴穗部間人皇女為皇后。是生四男。其一曰麩戸皇子〔更名豊耳聰聖徳。或

名豊聰耳法大王。或云法主王)。是皇子初居上宮。後移斑鳩。於豊御食炊屋姫天皇世、位居東宮。搃撰万機、行天皇事。語見豊御食炊屋姫天皇紀。其二曰來目皇子。其三曰殖粟皇子。其四曰茨田皇子。立蘇我大臣稻目宿祢女石寸名為嬪。是生田目皇子〔更名豊浦皇子〕。葛城直磐村女広子、生一男一女。男曰麻呂子皇子。此当麻公之先也。女曰酢香手姫皇女。歷三代以奉日神。

【用明記】

弟、橘豊日王、坐池辺宮、治天下三歲。此天皇、娶稻目宿祢大臣之女、意富藝多志比売、生御子、多米王〔一柱〕。又、娶庶妹間人穴太郎王、生御子、上宮之厩戸豊聰耳命。次、久米王。次、植栗王。次、茨田王〔四柱〕。又、娶当麻之倉首比呂之女、飯女之子、生御子、当麻王。次、妹須加志呂古郎女。此天皇〔丁未年四月十五日崩〕。御陵在石寸掖上、後遷科長中陵也。

【上宮聖德法王帝説】

又天皇、娶葛木当麻倉首比里古女子、伊比古郎女生兒乎麻呂古王、次須加呂古女王〔此王拜祭伊勢神前至于三天皇也〕。

古事記と法王帝説とは当麻倉首ということで共通し、親権者の名も比呂（古事記）／比里古（帝説）と近い。日本書紀は女性の名を広子としており、古典大系の注では父の名を母と誤認したのであろうとするが、いささか安直な判断だろう。というのはあわせて日本書紀が家筋を葛城直とし古事記・法王帝説が当麻倉首としつつ、帝説では葛木を冠しているからだ。すなわち当麻倉氏と葛城直氏との関係がここで問われることになる。さらに「当麻倉」を複姓とすれば、「蘇我倉山田」氏との関係も考慮に含まれるだろう。二上山周辺の在地勢力の問題が、この系譜のズレの中に込められているのである<sup>(18)</sup>。

麻呂子皇子についてはその名称の問題が次に提起される。日本書紀や古事記の記載から麻呂子皇子が「当摩皇子（当麻王）」と、母の出自氏族名もしくは母系の本貫地名で呼ばれていたことがわかる。麻呂子の名はおそらく丸子部を伝領したことによるのだろうが、この名称は継体天皇の時代から系譜上に伊勢の日神祭祀に関与する女性と組みで登場するという特徴を見せる。

日本書紀には5人の麻呂子皇子（梔子皇子）が見られる。そのうち「更名」としては宣化天皇皇子上殖葉皇子、敏達天皇皇子押坂彦日人皇子にこの当摩皇子の3名に用いられ、継体天皇皇子と欽明天皇皇子だけが単に「梔子皇子」とされる。そして継体天皇皇子以外は同母姉妹に伊勢の日神祭祀の女性を持つのである。伊勢の日神祭祀の女性は、伊勢鎮座伝承にかかわる崇神記紀、垂仁記紀、ヤマトタケル東征物語にかかわる景行記紀、そして雄略紀に見えた後、継体天皇記紀、欽明紀、敏達紀、用明紀と見られるが、継体天皇皇女の荳角皇女の祖父は、敏達天皇皇女の菟道皇女の祖父と同じ息長真手王となっている。継体天皇の時代と敏達天皇の時代と、まさに「時代年号、尤不合歟」という現象を見せるが、息長氏の姿が背後に見えるのが注意を引く。ここでは息長氏については措く。

天武天皇代の斎宮、大来皇女（蘇我倉山田石川麻呂の孫<sup>(19)</sup>）の直前の斎宮が、記録上ではこの当摩皇子の同母妹、酢香手皇女である。一方、当摩皇子の後裔が当麻公で、後に当麻真人氏となるが、大来皇女の次の斎宮、大宝年間の泉内親王のときの斎宮頭が当麻真人橘、その後任が慶雲2年補任の当麻真人橘、同時に伊勢守に任ぜられたのが当麻真人桜井。こうなると麻呂古皇子周辺に伊勢日神奉祀との関わりを考えないほうが不自然だろう<sup>(20)</sup>。その実態は不明であるが、古事記系譜に日子坐王と山代の荏名津比売との間に生まれた大俣王・小俣王兄弟のうち、大俣王の子曙立王が伊勢之品遅部君・伊勢之佐那造、小俣王は当麻勾君の祖となっている組み合わせが興味深い。

問題が当麻真人氏に広がる前に、麻呂子皇子の問題をまとめておこう。

まず出自氏族の問題で、當麻在地の「当麻倉」と呼称される氏族（あるいは家）がおり、葛城直氏

と関係があったことが推定される。さらに蘇我倉氏の存在と対比して「倉」に関する職掌についていたか、ついていた集団を介して蘇我氏との関係があった可能性が考えられる。そして推古紀三十二年条に見える蘇我馬子の「葛城県者元臣本居也」云々の主張、古事記に残る葛城氏と蘇我氏の同族を主張する系譜から見て、二上山周辺の在地勢力の関係の問題が提起される。なお、ここでは触れなかったがかなり古い段階で土師氏も関わると思われる。

次に系譜と名称の問題で、「麻呂子皇子」の名称を日本書紀にあたると、欽明天皇の時代以降、この名称を持つ皇子は齋宮と兄弟関係にあるということ。また当摩皇子の系譜からは、当麻真人氏が流れ出、大宝律令施行直後に齋宮頭を連続出していること。当摩皇子の妹が三代にわたって伊勢で日神を奉祀していること（齋宮）。以上からこの氏族は伊勢大神の祭祀に関与する位置にあったと想定される。

すなわち両者から、当麻地域には葛城地域の在地豪族（葛城直氏）と関係のある氏族（支族か？）があり、蘇我氏の支族である後の倉山田臣家と関係を持ちつつ<sup>(21)</sup>、用明天皇に妃を出すことで皇室と関係を強化し、その中から皇別氏族「当麻公（当麻真人）」氏が誕生したというアウトラインが描けるのである。

日本書紀によれば、当麻真人氏は、天武13年に三国公や猪名公、息長公とともに「真人」の姓をたまわっている。それ以前には当摩公広嶋、広麻呂、豊浜、国見の名が見え、真人姓下賜以降は当摩真人国見、智徳、続日本紀には桜井、楯、橋の名が元明紀までに見える。

国見が公姓と真人姓とで登場するが、公姓だけで名を見せる広嶋は壬申の戦い前夜に横死、広麻呂や豊浜も功臣ながら天武朝に没というところからみて、広嶋と広麻呂、豊浜は兄弟かそれに近い同じ世代、国見はその子にあたる世代であったと考えられる<sup>(22)</sup>。天武殯宮で奉誄をしているし、持統朝に東宮傳をつとめたあと、文武紀三年の越智山陵修造の記事を最後に記録から名を消すので、天武・持統天皇の時代を活躍次期とする人物と認められる。国見に一步遅れて、天武埋葬から文武大葬、持統天皇の伊勢行幸のときの留守官をつとめた智徳は国見の弟くらいの年齢となると考えるのがいい<sup>(23)</sup>。

そもそもその祖を麻呂子皇子とすれば、推古天皇代に活躍した記録があるので（推古紀11年7月条）、天皇系譜と照らして天智天皇から天武天皇の時代にかけての世代である広嶋や広麻呂は当摩皇子の孫あたりの世代と計算するのが妥当だろう。本宗家はそれほど大きな族譜を構成してはいないはずだ。

## （2）当麻真人氏と當麻寺

麻呂子皇子建立の寺院を現在の當麻寺の地に遷したのが、当麻真人国見だという。この人物についても『建久御巡礼記』で語られる縁起には、壬申の戦いで大友皇子の首を奉るなどの活躍が伝えられる。この氏族の中でもビッグ・ネームであったことがわかる。

中世の縁起では、當麻寺は、麻呂子親王建立の万法藏院を国見が、もしくは麻呂子親王自身が現在の地に遷して禅林寺と名付けたところにはじまるという。

当寺ハ、用明天王、第三、御子麻呂子、親王、建立。既ニ与聖徳太子御兄弟、故ニ依テ、太子、教訓ニ被ル造興寺ナリ。然ルニ此、伽藍本ハ、在テ河内国山田、郷ニ号ス万法藏院ト。（『私聚百因縁集』第七 1257）  
河内国石川郡山田村に万法藏院跡と伝える地が残り、遺物とされるものも伝存するらしいが<sup>(24)</sup>、一方で「法名号万法藏院（略）件伽藍者、今寺南五六町有之。旧礎存今。此云味噌路。」と伝える伝承もある（『上宮太子拾遺記』第三 1237）。ほぼ同時代に二つの所伝があったということは、すでにこれが伝承と化していたということだが、現在の當麻寺に前身寺院があったという点では一致しており、少なくとも現在の當麻寺に先行する寺院の存在が、古くから伝わっていたことがうかがえる。

そして、當麻寺の北東700mの地から、興味深い古代寺院跡が見つかっている。只塚廃寺と呼ばれ



るその寺院跡は當麻寺の金堂と同規模の仏殿を持ち、寺域は条里制の一町四方に相当する大きさ、官寺である川原寺式の古瓦などの出土品から白鳳年間に朝廷との関係を持つ中での建立であると推定される。南に宮殿規模の掘立柱の建築群跡が見つかっており、当麻氏の居館敷地内に設けられた仏殿という説もあるらしい<sup>(25)</sup>。天武紀14年3月壬申条に、

詔諸国每家作仏舎乃置仏像及経以礼拜供養

という記事がある<sup>(26)</sup>。「諸国每家」をどう解釈するか簡単には判断がつかないが、古事記序文の「諸家」の例に照らして「諸国・每家」と考えればあり得る話で、七世紀後半のこの地域の格式有る家となれば、八色の姓の筆頭にある当麻真人家になるだろう。ちょうど国見が一族の中心として活躍していたであろう時期に相当する。

しかし、もし只塚廃寺の地から現在の當麻寺に遷ったとするときに、素朴な疑問が浮かぶ。おそらく寺地としては、當麻寺の地より只塚廃寺の地のほうが条件がよいように思われるのである。伝承上は、靈夢により現在の地が託宣され、その地は役行者の領地であったというが（『建久御巡礼記』ほか）、年代はあわない。しかしそう説明されるころには當麻寺の伽藍配置に対して古くから不自然さを感じられて納得できる説明が求められていたということであろう。そしてその地を河内国山田郷としたり味噌路としたりするところにも、そう伝えようとする何らかの動機が潜んでいるはずだ。

さて、當麻寺は東塔（奈良時代末期の建立）、西塔（平安時代初期の建立）をもち、中央南向きに金堂、北に講堂（ともに中世の再建だが、両者の平面規模の比例値から本来は飛鳥時代の建立と想定される）を置いた薬師寺型の伽藍配置であるが（回廊は欠く）、西南には麻呂子山が迫り西北には二上山がある。その山麓の傾斜地に堂宇間の位置関係に歪みを見せるかなり不自然な伽藍配置を見せている。南に古代幹道横大路から竹内峠を越える道が走り、その道に面して参道が金堂の方に伸びていたのではないとも言われるが、金堂の前から南、念仏院を抜けて実際に竹内街道に向かって歩いてみると、尾根上の竹内古墳群を越えて道に下るのであり、参道を設けたにしては地形的な疑問が残る。境内はどう見ても東に向いて開けているのであり、曼荼羅堂（中世の再建だが、天平末年ごろに前身となる堂宇が立てられたらしい。しかし川原寺式丸軒瓦も出土しており金堂・講堂と同時期に建築物の置かれていた可能性は高いという）を中心とする伽藍と考える方が自然なのである。

堂宇の建立時期を時間軸上に並べてみると、まず金堂・講堂が造られ、曼荼羅堂（「西堂」＝菅家本『諸寺縁起集』が建てられ、そして東塔、西塔が建て、始まりから約100年後に結果的に薬師寺型の伽藍配置となったものらしい。薬師寺型の伽藍配置は金堂のすぐ前左右に塔を建てるが、當麻寺の場合、金堂前方の異なる尾根の上に東塔、西塔がそれぞれ建てられていて別途塔院が造られているような地形的構造を見せるが、薬師寺型伽藍配置としても金堂から離して塔を建てる形式は東大寺や大安寺など奈良時代になってから見られるようになるもので、當麻寺もそれをまねたのではないかもしれない<sup>(27)</sup>。

なお奈良時代と平安時代初期の当麻真人氏の宮廷との位置関係を見れば、天平宝字元年に即位をした淡路廃帝淳仁天皇は舍人親王と当麻山背との間に生まれた皇孫である。「はいたい天王」として当麻曼荼羅の縁起に登場する人物であるが、「母当麻氏、名曰山背。上総守従五位上老之女也」（『続日本紀』）と伝える。また平安時代初期では嵯峨天皇のもとに当麻氏から入内した女性がおり、所生の潔姫は臣籍降下して忠仁公、藤原良房の室となり、染殿（藤原明子、文徳天皇后、清和天皇母）を生んでいる（『尊卑分脈』）。それらのできごとが関係するかはわからないが、当麻真人氏が歴史の表舞台に近い位置に現れた時期と塔の建立の時期とが重なっていることは興味深い。

山麓の狭隘な地に金堂・講堂・西堂が建立された理由としては、曼荼羅堂基壇内にあるという古墳

(5世紀代)をはじめ周辺の古墳の存在から考えて、当麻真人氏の母系集団の先祖供養という性格を見出すのがいいだろう。

また、当麻が交通の要衝であったことから軍事的意味を見出す説もある<sup>(28)</sup>。

古代、当麻は交通の要衝であった。履中記に、

是に、倭漢直之祖、阿知直盗み出して、御馬に乗せ倭に幸まさしむ。(略)故れ、大坂山口に到り幸しし時に、一女人に遇ひぬ。其女人白して、「兵を持つ人等、多に茲山を塞へりき。当岐麻道自ら廻りて越え幸ますべし」。尔して、天皇歌ひて曰はく、

おほさかに あふやをとめを みちとへば ただにはのらず たぎまちをのる  
故れ、上り幸せる石上神宮に坐す。

とあるし、これは履中紀にも、

故三人扶太子、令乗馬而逃之〔一云、大前宿祢、抱太子而乗馬〕。仲皇子不知太子所在、而焚太子宮。通夜火不滅。太子到河内国埴生坂而醒之。顧望難波。見火光而大驚。則急馳之、自大坂向倭。至于飛鳥山、遇少女於山口。問之曰、「此山有人乎」。対曰、「執兵者多満山中。宜廻自当摩徑踰之」。太子、於是、以為、聆少女言、而得免難、則歌之曰、

於朋佐箇珥、阿布夜烏等謎烏、瀾知度沛麼、哆駄珥破能邏孺、哆山耆摩知烏能流。

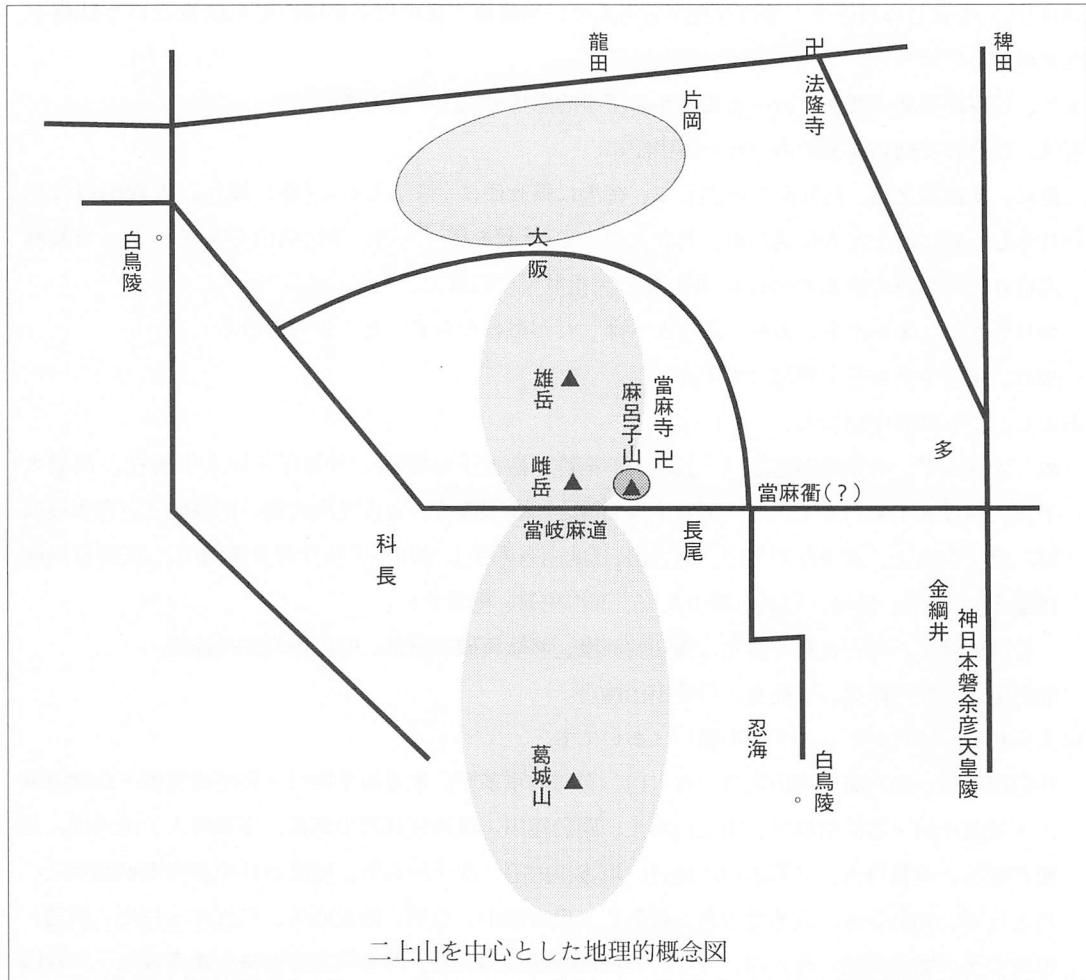
則更還之、発当県兵、令従身、自龍田山踰之。

と伝えられる。時代が下って壬申の戦いにおいても、

初將軍吹負、向乃樂至稗田之日、有人曰、自河内軍多至。則遣坂本臣財・長尾直真墨・倉墻直麻呂・民直小鮪・谷直根麻呂、率三百軍士、距於龍田。復遣佐味君少麻呂、率数百人、屯大坂。遣鴨君蝦夷、率数百人、守石手道。是日、坂本臣財等、次于平石野。時聞近江軍在高安城而登之。乃近江軍、知財等来、以悉焚税倉、皆散亡。仍宿城中。会明、臨見西方、自大津・丹比、兩道、軍衆多至。顕見旗幟。有人曰、「近江將老伎史韓国之師也」。財等自高安城降以渡衛我河、與韓國戰于河西。財等衆少不能距。先是、遣紀臣大音、令守懼坂道。於是、財等退懼坂、而居大音之營。是時、河内国司守来目臣塩籠、有歸於不破宮之情、以集軍衆。爰韓國到之、密聞其謀、而將殺塩籠。々々知事漏、乃自死焉。経一日、近江軍、当諸道而多至。即並不能相戰、以解退。是日、將軍吹負、為近江所敗、以特率一二騎走之。逮于墨坂、遇逢菟軍至。更還屯金綱井、而招聚散卒。於是、聞近江軍至自大坂道、而將軍引軍如西。到当麻衢、與老伎史韓國軍、戰葦池側。時有勇士来目者、拔刀急馳、直入軍中。騎士繼踵而進之。則近江軍悉走之。追斬甚多。(天武紀上)

と、その地勢的位置が戦場を招いている(下線は二上山付近の地名、および道名)。当麻は河内と大和と境界の地であり、幹線道路が集まる衢でもあった。

当麻寺を軍事拠点と見る説は、当否はともかくも、地勢的観点で考える足がかりをもたらしてくれる。すなわち古代幹線道路からいえば、上記壬申の戦いでの大和戦線の記述中に見えるように、藤原宮から西に直進する横大路がそのまま当麻寺の南、竹内峠を越えてゆくルートがある一方で、当麻の南、長柄から北に曲がり二上山東麓を上がって大坂を越える道があるわけで、このルートに即して南から当麻寺、石光寺、加守廃寺(大津皇子が関わる龍峰寺に比定されている)という古代寺院が並ぶ。そして当麻寺には白鳳年間の、石光寺には天智朝のころの弥勒仏<sup>(29)</sup>が本尊としてある(加守廃寺は不明)。また大坂から二上山を越えた先の河内の野中寺にも天智朝のころの弥勒仏が伝わることを見れば、この傾向が二上山との関わりの中で生じた現象であると考えていいように思うのである。



### (3) 弥勒仏と律令国家

万葉歌人、山上憶良は次のように詠う。

竊以 釋慈之示教〔謂釋氏慈氏〕先開三歸〔謂歸依佛法僧〕五戒而化法界〔謂一不殺生二不偷盜  
三不邪淫四不妄語五不飲酒〕周孔之垂訓前張三綱〔謂君臣父子夫婦〕五教以濟邦國〔謂父義母慈  
兄友弟順子孝〕故知 引導雖二 得悟惟一也〔以下略〕

(万葉集卷五「悲歎俗道假合即離易去難留詩一首〔并序〕」より序の冒頭部分)

冒頭に出てくる「慈氏」が弥勒のことだ。はじめに釈尊と弥勒とによる仏法教化を、つぎに周公旦と孔子とによる儒教教育を対にして挙げ、導き方は異なってもたどりつく先は同じだと論じる。「儒仏帰一」である。宮廷人の儒学仏法の享受の一面がうかがえる。

時代が下って、円珍が延暦寺の年度者加増の請願をした上表文は次のように語りだされる。

国之為国、本依設礼、人之為人、亦由行礼、故書曰、人有礼則安、無礼則危、經曰、人能生行礼、  
得生天上、是知、内經外書、以礼存立、〔以下略〕

(日本三代実録仁和3年3月14日条)

文中の「得生天上」とは天上に昇り弥勒にまみゆることをいい、そのためには「礼」が大切であるという。憶良の認識と同じく儒教の徳目と仏法とがひとつになっているわけだが、速水脩によれば、この上表文は朝廷の官僚たちの規範となる儒教的徳目の「礼」を仏法の「戒」と同一視することで、律令官僚制と鎮護国家との融和をはかった結果に成立する文言だという。その「戒」こそ弥勒信仰が重

視するものであるらしい<sup>(30)</sup>。

日本に弥勒仏が伝わったことは、敏達紀十三年九月条に、

秋九月、從百濟來鹿深臣〔闕名字〕、有弥勒石像一軀。佐伯連〔闕名字〕、有仏像一軀。是歲、蘇我馬子宿禰、請其仏像二軀、乃〔略〕經營仏殿於宅東方、安置弥勒石像。屈請三尼、大会設齋。と見えるのにはじまる。『扶桑略記』によれば、このときの石像は後に元興寺の東堂におさめられたらしい。また、当摩皇子が新羅征討を断念した年、推古紀十一年の十一月条に、

十一月己亥朔、皇太子謂諸大夫曰、我有尊仏像。誰得是像以恭拜。時秦造河勝進曰、臣拜之。便受仏像。因以造蜂岡寺。

と見える。現在広隆寺に残る弥勒半跏思惟像がそれだという（『扶桑略記』）。

また「大織冠伝」には、

鎌足薨勅、如汝誓願從觀世音菩薩之後、到兜率陀天之上、日々夜々聽弥勒之妙説、朝々暮々轉真如之法輪

とある。鎌足は死して弥勒浄土の兜率陀天に昇ったらしい。

天武天皇9年の薬師寺建立にあたって『扶桑略記』には「西院安置弥勒浄土障子」とあるし、元正紀養老6年12月条には「奉為浄御原御宇天皇造弥勒像」とある。

故人の供養のための弥勒仏造像は『扶桑略記』養老5年8月3日条に、藤原不比等のために天皇と太上天皇が興福寺北円堂に、橘三千代が金堂内に弥勒像を造っている例が見える<sup>(31)</sup>。

そうしたとき、當麻寺の弥勒仏というのは、朝廷内の弥勒信仰を背景に本尊として置かれてくることは当然であろうし、また先祖追善供養としてその墓所に設営されてくるのも当然ということになるだろう。いいかえれば、當麻真人国見らは朝廷に奉仕する者として宮廷の弥勒信仰に触れていたはずだ（というより一般的な教養であったろう）。只塚廃寺の南の居館跡が當麻真人氏のもので、その敷地内に天武14年詔に対応するように伽藍が設けられていたとするなら、鎮護国家的な意味にリンクする寺院であったはずだ。一方で麻呂子山下の古墳——祖墓としての伝承があったはずだ——に先祖供養の堂宇を作り、弥勒を祀ったとすれば、そこに公／私の対立が生じるが、やがては地形的特性もあって、二寺が合一化されていったのではなかったか。すなわち、より高所にある現當麻寺の位置が弥勒の浄土（兜率天）と観想せられたということだ。その合一化を説明する言説として、国見による移転伝承が生まれてきたのだろう。

### 3. 古代王権の神話的世界観における「二上（山）」

#### （1）中臣寿詞の「二上山」

藤原頼長（1120～1156）の日記『台記』の別記（1135～1155）に掲載されている「中臣寿詞」は、康治元年の近衛天皇踐祚大嘗祭で奏上された献饌の祝詞である。「中臣寿詞」は別途、天仁元年の鳥羽天皇踐祚大嘗祭で奏上されたテキストも伝わり（皇太神宮禰宜、荒木田守晨（文正元年～永正13年）自写本、西田長男『神道史の研究 第二』所収）、両者若干の違いはあるがおおむね同じ詞章を伝える。

延喜の踐祚大嘗祭式辰日条に、

皇太子入自東門〔待親王以下就位畢乃入〕五位以上入自南門各就版位六位以下相續參入立定神祇官中臣執賢木副笏入自南門版位跪奏天神之寿詞忌部入奏神璽之鏡劍訖退出〔若有時濕即立奏之〕と見える「天神之寿詞」が「中臣寿詞」である。これは奈良時代の神祇令に、





音) 天降坐于竺紫日向之高千穗之久士布流多氣〔自久以下六字以音〕。  
延喜式祝詞のうち天孫降臨を語る六月晦大祓の祝詞でも、

天之磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別弓天降依佐志奉支  
とだけある。

二上山が登場するのは日本書紀の正伝とその一書である。

#### 【卷二、第九段正伝】

皇孫乃離天磐座〔天磐座、此云阿麻能以簸矩羅〕且排分天八重雲、稜威之道別道別而、天降於日向襲之高千穗峯矣。既而皇孫遊行之状也者、則自穗日二上天浮橋、立於浮渚在平処〔立於浮渚在平処、此云羽企尔磨梨陀毗邏而陀陀志〕而薺穴之空国、自頓丘覓国行去〔頓丘、此云毗陀烏。覓国、此云矩式磨儀。行去、此云騰褒屢〕到於吾田長屋笠狭之碕矣。

#### 【同異伝（一書第四）】

遊行降来、到於日向襲之高千穗穗日二上峯天浮橋、而立於浮渚在之平地、薺穴空国、自頓丘覓国行去、到於吾田長屋笠狭之御碕。

正伝はまず皇孫が「日向襲之高千穗峯」に降ったことをいい、「既而皇孫遊行之状也者」とさらにそこから「吾田長屋笠狭之碕」に至る様子を詳述する。つまり二つのアクションを描写している。

異伝のほうは、そのまま天降る描写で「吾田長屋笠狭之御碕」まで至る。すなわち1アクションである。

日本書紀の第九段は異伝において降臨の描写そのものは三つしかない。残るは、

#### 【同異伝（一書第二）】

故天津彦火瓊瓊杵尊、降到於日向穗日高千穗之峯、而薺穴胸副国、自頓丘覓国行去、立於浮渚在平地、乃召国主事勝国勝長狭而訪之。

#### 【同異伝（一書第六）】

是時、高皇産靈尊、乃用真床覆衾、裏皇孫天津彦根火瓊瓊杵根尊、而排披天八重雲、以奉降之。故称此神、曰天国饒石彦火瓊瓊杵尊。于時、降到之处者、呼曰日向襲之高千穗添山峯矣。及其遊行之時也、云云。到于吾田笠狭之御碕。

であるが、字句に共通するところが多い（下線部）。異伝の描写は、第六の一書以外は1アクション（「而」で続けている）で、しかも第二の一書が正伝の前半、第四の一書が正伝の後半に重なる。第六の一書はアクションを分けているが（「矣」字で区切っている）、後半に省略を見せている。したがって正伝は二つの降臨の描写を整合させて正伝としたものと考えられるが、何にせよ——「一書論」はここでは論じない——天磐座から天八重雲を分けて降臨してきた皇孫が「吾田長屋笠狭之御碕」に至る通過地として置かれていることになる。「天浮橋」とあるのはまさに越境のための通路としての性格が期待された表現だ。いいかえれば天と豊葦原の瑞穂国との接点に位置する場所なのである。

## 4. 宮都と二上山

### （1）古代王権のエクリチュール

古代王権がヤマトにその基盤を置いた由来の中で、神話的な言説をもとめれば、記紀にみられるそれが確認できるもっとも古いものであろう。すなわちそれは律令制国家建設の中に誕生した言説なのであって、宮都というハードウェアと、官僚機構というソフトとで構築される空間を支える時間の叙述と言いかえることができる。

いまさら「三山鎮めをなす云々」の章句（平城遷都の詔）をひきあいだすまでもなく、大和盆地の自然の中に人工的に現出させられた宮都（飛鳥京・藤原宮と新益京・平城京など）は周囲の景観と結びついて設計されている。その中に二上山は置かれてみられなくてはなるまい。

とはいえ、飛鳥京の跡に立ってながめると、二上山は見えない。甘樫丘が遮るのだ。この丘を越えて二上山を臨むには石舞台のあるあの高さまで——島の宮なら、見えるということだ——登るか、飛鳥寺の北、安倍山田道まで出ないと見えない。また平城京からは雌岳が雄岳に隠れてフタカミには見えない。

「天の二上」の登場する中臣寿詞は、まさに二上山を西に直視する藤原宮（新益京）建設の中、持統天皇の即位のときから記録に残る。天武天皇と持統天皇による国家建設の中で二上山が古代王権（皇権）の神話的言説の中に定位されたことがうかがえる。

現実に見える二上山の向こうには河内、難波津、さらに筑紫国があり、その地から神日本磐余彦天皇はやってきた。伊勢の大神を遥拝して臨んだ壬申年の戦いにおいて、先に引用した中でヤマト軍が金綱井（二重下線）に駐屯したとき、

先是、軍金綱井之時、高市郡大領高市県主許梅、儻忽口閉、而不能言也。三日之後、方著神以言、吾者高市社所居、名事代主神。又身狹社所居、名生靈神者也。乃顯之曰、於神日本磐余彦天皇之陵、奉馬及種々兵器。便亦言、吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉。今且立官軍中而守護之。且言、自西道軍衆將至之。宜慎也。言訖則醒矣。故是以、便遣許梅、而祭拜御陵、因以奉馬及兵器。又捧幣而礼祭高市身狹、二社之神。

という事件があり、やがて記紀に終結する伝承（初代天皇の陵墓の存在はそこに至るまでの物語を生んでいるはずだ）の存在をうかがわせる。

神日本磐余彦天皇のふるさと、筑紫には天からの通り道として「天の二上」があったと書紀は語る。高市皇子尊殯宮挽歌で天武天皇が皇孫尊と重ねられて表現されるのであるならば、ヤマトの二上山も天との通路に重ねてもいいだろう。

そして中臣寿詞では、神ろき神ろみ命との交流の場所として「天の二上」は位置づけられている。

これら古代の伝承の語る二上山は、天皇の時空を語る神話的言説の中に位置付けられて宮都の西にそびえるのである。

## （2）宮都人のエクリチュール

宮都で生活する“新しい人々”。宮都という人工的に作られることで視覚化された中央集権システムの中で動く律令官人、そしてそれをめざす人々やその身内。あわせて「宮都人」と呼ぶことにするが<sup>(32)</sup>、文書による機械的な運営システムは彼らに教養（読み書き算盤、儒教仏法、文学音楽）を要求する<sup>(33)</sup>。求められたのは実務的教養だけでなく儒教的な徳目や仏法の慈心であったはずだ。それらは「礼」と「戒」というところで融合しながら、彼らの行動を規制し制御する機能をしていたにちがいない。他者への行動規制基準の「礼」と自分への行動規制基準の「戒」と。

その西に二上山はたたずみ、そしてその麓に當麻寺が、まさに天武天皇から持統天皇にかけての時代に登場する。その地域を本貫とした顕臣が、壬申年の戦いで勲功をたてた當麻真人氏、国見とその親族たちであった。當麻寺の縁起伝承が白鳳9年や朱鳥14年の年代を伝えるが、それが薬師寺建立の天武天皇9年や諸家に仏堂建立の詔を下した天武天皇14年と数を同じくして伝えるところには、當麻寺側から當麻真人国見と天武天皇とを通して宮廷とのつながりを主張するメッセージを読み取ることができる。

當麻真人氏は當麻の在地豪族、おそらく葛城氏の流れで蘇我氏とも近かった集団に皇族の血が流れ

て成立した皇別氏族である。その誕生にあたって、伊勢の日神信仰にかかわる職務が入り込んだらしい。祖とされる当摩皇子が麻呂子皇子と呼ばれ、この名称は斎宮と組みで伝えられてきた。妹の酢香手皇女は用明・崇峻・推古の3代にわたって伊勢で日神を奉祀したという。その間に祭祀に関するノウハウが当麻真人氏に定着したものであろう。国見の次の世代と思われる橋や楯、桜井（彼はあるいは国見の末弟かもしれない）らが斎宮頭や伊勢守に任ぜられているのはそういう背景があったためだと思われる。

国見ら当麻真人氏がその居館内に寺院を建立する一方で、その母系の先祖供養のために古墳の脇に弥勒仏を祀る仏堂を建てた。祖の麻呂子皇子の霊夢によるものと後の縁起は語るが、国見らにとってみればそれは弥勒の浄土に見立てられるものであった。そこに先祖代々、そして自分たちの兜率天への往生を願う気持ちがあったはずだ。「見立て」といったが、それは目の現実空間に虚構空間を重ねて同体と見ることであって、古くは古事記の国生み神話にもある発想である。高市皇子殯宮挽歌でも皇孫尊と天武天皇とが重ねられ同体化されて歌われている。あの世とこの世との重なる場が、當麻寺の地であった。

その重なるところにまた神話的世界が重なってくるだろう。皇孫尊の故郷としての天と死後生まれゆく兜率天との通路として二上山は天の二上と重なってゆく。

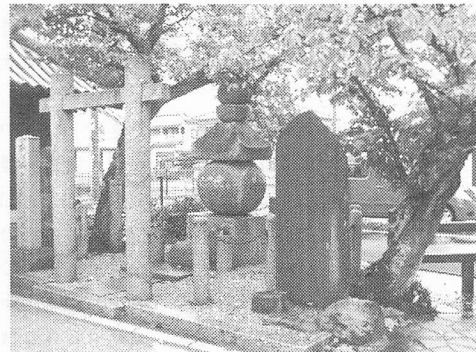
その浄土の姿を描いた曼荼羅が當麻寺に存在する。当麻真人老の孫、淡路廢帝（淳仁天皇）の時代に作られて奉納されたと伝える。このときの曼荼羅（根本曼荼羅）の銘の部分が残っていないが、『建久御巡礼記』には「天平宝字七年」の年記があったと寺僧の証言が記録されているので、舶來說もあるが、この年次に曼荼羅が奉納されたとみておく。奉納にあたって厨子が造られ、堂も立て直された。この厨子の形が長六角形をしているのが、加守廢寺で発掘された長六角堂と、形状が一致しているのが気になるところであるが、今のところその関係を推測する手がかりはない。

同じくして塔も築造が始まる。

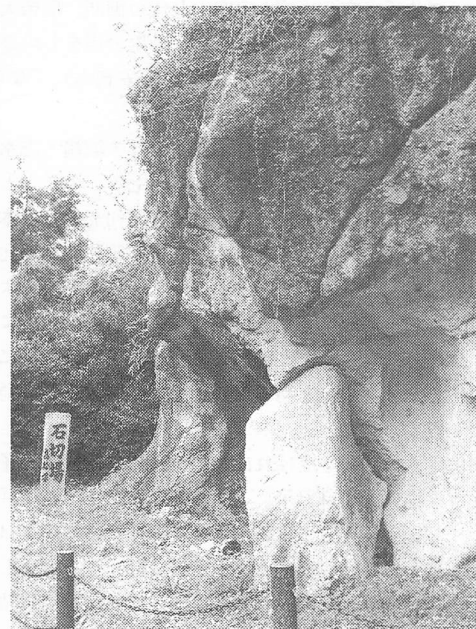
当麻真人氏がこの時期にどう活躍していかは記録が少ないけれども、当麻真人東人などが、智徳と同じように天皇大葬にあたって諫を奏上していて、そこから家職として奉諫があったかのようにもうかがえるが、むしろ智徳の経験とあの世の麓にすまうという当麻真人氏の地域的特性とからの人撰を招いたと考えるほうがいいのではないか。

これら一連の動きは個々が直接に関係はもたずとも、二上山の麓、當麻という空間と時間とが生み出した現象群としてとらえたい。

以上に加え説き残した件に垂仁紀7年7月7日条に見える当麻蹶速と野見宿禰との相撲の話がある。野見



當麻寺参道の途中にある蹶速塚（江戸時代の図会では国見の墓とされている）



二上山西側中腹に伝わる高松塚古墳用林切出場（ともに志水撮影）

宿祢は土師氏の祖であり、また二上山は実際に古墳の石棺等の資材を切り出した地であるというし(切り出した現場と伝える場所がある)、箸墓古墳築造にあたって二上山から石を運んだという伝承(崇神紀)、二上山を越えた先の土師氏の本拠地の存在などから、土師氏もこの土地に関わっていた可能性は高い。この問題は別に機会を得て考えたい。

(註)

- (1)平成18年と19年の行事の調査に基づく。この調査は当プロジェクトの一環として研究代表大石泰夫・菊池義裕・伊藤高雄・吉川祐子・城崎陽子・渡部修に志水を加えた7名で行い、調査報告はそれぞれの年度の8月に古代学研究所で行われた研究会でなされた。以下の記述は研究会に提出された報告書をもとに志水が時系列に即して構成したものである。
- (2)「寛弘元年の頃、僧都ならびに寛印供奉と共にこの所に来り、来迎の本尊また二十五菩薩の仮面を彫りて、同二年三月十四日法如往生の日を以て迎接会を行ひたまふ。」(『西国三十三所名所図会』嘉永6年)。「僧都」とは恵心僧都源信のこと。源信は當麻の出身である。また説経『中将姫御本地』(江戸時代初期、『説経正本集第三』所収)には「四月十四日のねりくやうには」というフレーズが見える。
- (3)茹でたカワガニと草餅は練供養の名物であったと参詣の老夫婦は語る(採話：伊藤高雄)。カワガニ店は平成18年度の調査の際には出店していなかったが平成19年度調査のときには山門前駐車場入口脇に店が出ていた。
- (4)「その菩薩に粧ふ人は郷中の旧家にして、これを菩薩講と号す。」(『西国三十三所名所図会』)。
- (5)4月29日午後1時から護念院に菩薩講の人たちが集まり、本堂で中将姫の卒塔婆供養を行った後、紙漕によるくじを引く。くじには1から25までの番号が書かれてあり、引いたのちは寺から番号に対応した木札をいただく。この木札で練供養当日に衣装・面と引きかえるのである。木札の古いものには元禄の年号を残すものもある。
- (6)「さんせう大夫」「小栗判官」「愛護若」など中世から近世にかけて流行した語り物。近世には操人形と組んで小屋掛け上演された。寺社の縁起を貴種流離譚の様式で語るもので、本来的な演目の数は少なく、「五説経」と呼ばれるものが有名だが演目の選定は上記3演目以外は出入りがある。
- (7)慶安四年刊本「中将姫本地」では「よこはぎの右大臣豊成と申人あり」とだけあり、説経『中将姫御本地』では「大しょくわんに四せのそん、よこはぎの右大臣、とよ成と申奉るを、なんばの大じんとぞ申ける」と設定が細かい。説経「さんせう大夫」や「小栗判官」には「伊勢こはぎ」「常陸こはぎ」という主人公を助けるキャラクターが登場するが、共通する「こはぎ」の名称に注目したのが折口信夫である(「餓鬼阿弥蘇生譚」「小栗判官論の計画」)。「よこはぎ」も関係するのかもしれない。
- (8)春日大明神の申子という所伝も残る(絵巻「中将姫」、『室町時代物語大成第九巻』所収)。
- (9)謡曲「当麻」に「人皇四十七代の御門、廢帝天皇」とある。
- (10)「そのよにならをいで給ひ、七里の道をしのびつゝ、たへまをさしてぞいそがれける」(説経)、「奈良より、当麻へは、七里の道なるを」(慶安刊本)、「ならより、たえまてらへは、七里の道也けるを」(絵巻)とはほぼ章句は一致している。
- (11)伝承の収集は渡部修により、渡部・城崎・志水によって実地踏査をした。
- (12)蓮糸曼荼羅銘文には「天平宝字七年」のこととしてある。
- (13)和久順子「中将姫説話系譜考」昭和58年『日本の古典と口承文芸』(有精堂)。
- (14)『中将姫説話の調査研究報告書』昭和58年、元興寺文化財研究所。「当麻曼荼羅疏」は『浄土宗全書』13所収。
- (15)引用は『當麻町史』続編に所収された本文による。本紙面が横組である関係上、返点は省いた。
- (16)なお時期的にやや先行する『伊呂波字類抄』には、「当麻寺 名禪林寺、在大和国、横帯大納言女子建立」とあってヨコハギと当麻寺との関係が平安末期には伝承されていたことが知られる。
- (17)志水「古事記と当麻真人氏」平成元年、「国栖奏の歌」平成2年。ともに『古事記生成の研究』(おうふう)所収。
- (18)さらに問題を広げれば、丹後半島に麻呂子皇子を祀る神社があるが、謡曲に麻呂子皇子の丹後半島平定物語を描いた「麻呂子」という作品がある。この「麻呂子」は当麻皇子のことであるが、丹後半島を平定したと記紀が伝えるのは日子坐王であり、古事記ではその系譜に当麻勾君を出す。また天之日矛系譜には当摩之咩斐が組み込まれそこから葛城高額比売を経由して息長帯日売を登場させる。丹後と朝鮮半島とのつながりや(考古遺物で交流が確認できる)、新羅征討物語に見える朝鮮半島とのかかわりを見ると、二上山周辺の異国文化受容の問題まで見はるかすことができる。
- (19)大来皇女の母、太田皇女は天智天皇と蘇我倉山田石川麻呂の娘との所生子である。弟の大津皇子とともにそ

- の呼称が地名に由来する（大来＝吉備の邑久、大津＝筑紫の那大津）。妹の鸕野皇女（持統天皇）の呼称も地名に由来するといひ（直木孝次郎『持統天皇』昭和35年、吉川弘文館）、この血族集団は御子の名称に地名を用いる特徴を持つらしい。太田皇女も地名に由来する呼称とすれば、旧当麻町内に「太田」という大字が残る。この地名がどこまで古いものかはわからないが、大来皇女が齋宮に任ぜられたことや、大津皇子が二上山付近に埋葬される背景に姉弟の母系集団の存在があるのではないかというひとつの可能性を提起する。
- (20)すでに犬飼公之「当麻智徳と柿本人麻呂」昭和57年『宮城学院女子大学基督教文化研究所研究年報』16などが指摘するところである。
- (21)当麻から竹内峠を越えた山田の地に蘇我倉山田石川麻呂誕生地と伝承される土地がある。
- (22)国見は豊浜の子というが（『當麻町史 続編』）未詳。
- (23)当麻真人智徳については志水前掲「古事記と当麻真人氏」参照。
- (24)川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦や万法蔵院銘のある茶釜など（太子町立竹内街道歴史資料館『二上山麓の古代寺院』による）。
- (25)前掲『二上山麓の古代寺院』。
- (26)天武紀の記事を分類すると、意外に仏事関係の記録が多い。即位後の事件を記録する巻二十九には、525前後の記事を数えることができる。記事の内容を見ると、神事（51）・仏事（56）・外交（96）、卒去（48）、任官・叙位・賜姓（32）、祥瑞・天文・珍事（50）、天象・天災（36）となり（括弧内は記事の件数。中には複数の項目に分類できるものもあるし、分類上問題を持つ記事もあるからここは傾向をうかがう程度の概算として示した）、神事をぬき外交に次ぐ記録数となる。考えてみれば、天武天皇は吉野に出家したまま壬申の戦いに臨み勝ち抜いて即位した天皇であった（日本書紀には還俗の記事がない）。
- (27)『日本の古寺美術11 当麻寺』（昭和63年、保育社）。
- (28)前掲『日本の古寺美術II 当麻寺』。
- (29)現在の石光寺の弥勒堂の弥勒像は後代のものだが、境内から天智朝のころと見られる弥勒石仏が発掘されている。
- (30)速水脩「律令社会における弥勒信仰の受容」昭和59年『民衆宗教史叢書 弥勒信仰』雄山閣。
- (31)速水前掲論文に上代の弥勒信仰に関する記事が19例報告されており、速水によればそのうち七例が追善的弥勒上生信仰に分類される。
- (32)万葉集では「大宮人」といい、折口信夫は「万葉びと」といい、また「律令官人」などと当時の宮廷を中心とした世界に生きた人と呼ぶ言葉は多いが、官人候補者や官人の周囲に生きる人々を含んでの謂としてとりあえず「宮都人」としてみた。
- (33)続々と発見される木簡に見られる習書や落書きが彼らに何が要求されていたかをうかがわせるものがある。